

『万葉集』五〇一番と二四一五番の比較

間宮, 厚司

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

56

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

11

(発行年 / Year)

2008-03-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003216>

『万葉集』五〇一番と二四一五番の比較

間宮厚司

はじめに

旧全集本↓①ワレ・②アレ

新全集本↓①アレ・②アレ

①娘子らが〈未通女等之〉袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ思ひき我は

〈憶寸吾者〉(万四・五〇一)

②娘子らを〈処女等乎〉袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ思ひけり我は

〈念来吾等者〉(万一一・二四一五)

①は柿本人麻呂の、②は人麻呂歌集からの万葉歌で、二首は類歌の關係にある。違いとして、まず明らかなのは初句の①ヲトメラガとヲトメラヲ、それから結句の①オモヒキと②オモヒケリである。そして、それだけかという点、そうではない。結句にある「我」の訓じ方が、『万葉集』のテキストによってまちまちなので、新旧の日本古典文学大系(岩波書店)と日本古典文学全集(小学館)から、異同を示そう。

旧大系本↓①ワレ・②ワレ

新大系本↓①ワレ・②アレ

これを見ると旧全集と新大系は同じだが、それ以外は異なっている。しかし、各テキストの頭注や脚注を見ても、なぜワレ・アレと訓んでいるのか、その理由は特に説明されていない。

本稿では、なにゆえ①と②でワレとアレの訓みが揺れるのか、そのことをめぐり、いくつかの視点から検討を加えたい。

一 ①〈憶寸吾者〉はワレかアレか

①の結句〈憶寸吾者〉をオモヒキワレハと、〈吾〉字をワレと訓むテキストは、いったい何を根拠にしているのであろうか。これはおそらく、短歌第五句の句中に単独母音が含まれている場合に圧倒的多数が八音の字余りになることが、木下正俊「準不足音句考」(『万葉』二二六号、一九五八年)などの研究成果により、判明したからだと推察される。仮に、ここをオモヒキアレハと訓むと、句中に単独母音のアがあるのに七音句

で字余りにならず、例外となってしまう。

いま確認の意味で、ワレとアレを句中に含む短歌第五句の仮名書きの全用例を列挙してみよう（ワレとアレの箇所は原文表記にし、傍線を付す）。

（句中にある第五句ワレの仮名書き全例）

◇旅行く和礼を（万七・一二三四⑤）

◇廬りせむ和礼（万一五・三五九三⑤）

◇船出す和礼は（万一五・三五九九⑤）

◇廬りす和礼は（万一五・三六〇六⑤）

◇旅行く和礼を（万一五・三六〇七⑤）

◇旅行く和礼を（万一五・三六三六⑤）

◇いかに和礼せむ（万一八・四〇四六⑤）

◇出で立つ和礼は（万二〇・四三七三⑤）

◆さして行く和礼は（万二〇・四三七四⑤）

（句中にある第五句アレの仮名書き全例）

○児ろ安礼紐解く（万一四・三三六一⑤）

●いで安礼は行かな（万一四・三四九六⑤）

右の短歌第五句の句中にあるワレの例を見ると、単独母音を含まない七音句（◇印八例）か、単独母音を含む八音句（◆印一例）に限られる。

一方、アレのほうを見ると、八音句（○印一例）であるが、単独母音を含む形で字余りを起こしているので、問題ない。しかし、●印の「い

で安礼は行かな」（万一四・三四九六⑤）は八音句に単独母音のアとイの二つを含むから、八引く二で、これは実質六音分に相当するため、短歌第五句の字余りのあり方としては例外になっている。これが◆印の「さして行く和礼は」（万二〇・四三七四⑤）のように、●印のアレがワレであったならば、例外にはならなかった。ただし、●の例は東歌である。

ここではワレ・アレと字余りの関係について確認しているが、ワガ・アガの場合にも字余りのあり方から例外となっているのは、いずれも東歌に限って見出される。

あどか安我せむ（万一四・三四〇四⑤）

歩め安我駒（万一四・三四四一⑤）

右の二例は短歌第五句の句中にア（我）を含んだ非字余り（七音句）の例で、本来ならばワとあるべきところなのにアとなっている確実な例である。とはいえ、この二例も東歌だから（中央の言語と異なり）例外的にそうなった可能性は極めて大きい。

なお、これが短歌の奇数句（第一句・第三句・第五句）でなく、偶数句（第二句・第四句）の場合は、句中にアレ（我）を含んだ七音句の例が見られる。

恋ふるに安礼は（万一五・三七四四②）

旅行く安礼は（万二〇・四三二七④）

①の〈憶寸吾者〉は柿本人麻呂の短歌第五句で、東歌ではない。よつて、字余りの観点(万葉短歌の奇数句は句中に単独母音が入ると、ほとんどが字余り句になるという原則)からは、あえてそれに反したオモヒキアレハという訓み方をする必要は認められず、単独母音を含まない形のおモヒキワレハの訓みのほうが穏当であるとの結論に達する。

それならば、なぜ新全集は①〈憶寸吾者〉をオモヒキアレハと訓んだのであろうか。推測の域を出ないが、新全集は②の〈念来吾等者〉をオモヒキアレハと訓むが、類歌ということでそれに合わせたのだろうか。あるいは、動詞オモフ(思)はワレよりもアレのほうがと呼応する傾向にある点を考慮したのであろうか。

我妻多賀子「第一人称の代名詞ワレとワ」(『星美学園短期大学研究論叢三三』二〇〇一年)は、「三、ワレの用法」において、『万葉集』における仮名書きのワレ五八例とアレ四八例を比較し、次のように指摘する。

ワレと併用される動詞を見ると、「行く」「寄す」「漕ぐ」「送る」「来る」「出で立つ」など動きの明らかなものが多い。反対に、アレの場合は「思ふ」「恋ふ」「待つ」など静的な動詞がほとんどである。

また、小柳智一「複数と例示——接尾語ラ追考——」(『国語語彙史研究会・第八三回・二〇〇六年九月三〇日 於大阪成蹊短期大学』)は、ワ系・ア系と共起する用言について分布の偏りを調査した結果、動詞オモ

フ(思)はア系が二〇例であるのに対し、ワ系は九例で、両系併用であると報告する。動詞オモフ(思)との結び付きは、ワ(我)よりもア(我)のほうが確かに強い傾向にある。この点を重視するならば、①〈憶寸吾者〉はオモヒキアレハと訓むことになるのであろう。

このオモヒキアレハと同じく、短歌の第五句に単独母音を含みながらも字余りになっていない句については、山口佳紀『『万葉集』における短歌の訓法と字余り——短歌一・三・五句の場合——』(『高岡市万葉歴史館紀要』一六号、二〇〇六年)が、例外として次のように一六例を一覧している。

※安見兒衣多利(万葉二・九五⑤) やすみこえたり

※真浦悲毛(万葉二・一八九⑤) まうらがなしも

※吾毛将思(万葉四・五八七⑤) あれもおもはむ

※入将座(万葉四・七五九⑤) いれいませむ

※当不相将有(万葉六・九五三⑤) はたあはざらむ

※軻之浦廻乎(万葉七・一一八三⑤) とものうらみを

※麻気者失留(万葉七・一四一六⑤) まげばうせぬる

※言尔有鴨(万葉二・二九一五⑤) ことにあるかも

※安杼加安我世牟(万葉一四・三四〇四⑤) あどかあがせむ

※安由禿安我古麻(万葉一四・三四四一⑤) あゆめあがこま

※汝波安杼可毛布(万葉一四・三四九四⑤) なはあどかもふ

※伊弓安礼波伊可奈(万葉一四・三四九六⑤) いであれはいかな

※安可思都流宇乎(万葉一五・三六五三⑤) あかしつるうを

※多婢師安礼婆（万葉一五・三六七七⑤）たびにしあれば

※水葱煮物（万葉一六・三八二九⑤）なきのあつもの

※由米情在（万葉一九・四一七九⑤）ゆめこころあれ

このように、短歌第五句の句中に単独母音があつて、字余りになつていない例は、卷一四の東歌以外にもあるので、オモヒキアレハの訓が字余りの点から絶対に認められないとまでは言い切れない。

しかしながら、ワレ・アレとオモフの呼応の比率のほうは、ある程度の傾向が見られるという程度に留まる。実際、字余りとは関係しない句頭に位置するワレとアレが、同一表現内に出現した次のような用例がある以上、オモヒキアレハを強く主張することはできない。

和礼をし思はば（万一八・四〇五五）——阿例をし思はば（万二

〇・四四二六）

和礼は斎はむ（万二〇・四三九八）——阿例は斎はむ（万二〇・四

三五〇、四三七二）

和礼恋ひめやも（万五・八五八）——安礼恋ひめやも（万一四・三

五〇八）

和礼を除きて（万一八・四〇九四）——安礼を除きて（万五・八九

二）

結局、短歌第五句に単独母音を含むと字余りになるという原則は、ワレ・アレと動詞オモフなどとの呼応関係よりも、相当に強固なものであ

るから、①（憶寸吾者）はオモヒキワレハと訓んでおくのが無難である。う。

二 ② 〈念来吾等者〉はワレかアレか

それでは、②の〈念来吾等者〉はどうであろうか。おうふう本『万葉集』は、オモヒケリワレハと訓じ、頭注に掲げられた異訓オモヒケリアレハは、塙書房本『万葉集』のみである。しかし、近年の新全集本や新大系本を見ると、いずれもオモヒケリアレハで訓じられている。そうした理由は、オモヒケリワレハと訓むと、句中に単独母音を含まない字余り句になってしまうため、不適切な訓になると判断されたからに相違ない。

実際、澤瀉久孝『万葉集注釈』（中央公論社）は、二四一五番歌の【訓釈】で、「諸注にワレハと訓んでゐるのによると字余例外の八音になるので、アレハと訓むべきであらう」と解説する。よって、字余りの観点からは、オモヒケリアレハと単独母音アを含む形で訓むのがよい。そうした中で、伊藤博『万葉集釈注』（集英社）は、次の理由から、単独母音を含まない字余り句の例外となるオモヒケリワレハの訓のほうを支持する。

字余りになるのでオモヒケリアレハの訓もある。原文「吾等」を尊重して、あえてオモヒケリワレハと訓む。ワ行音を含む句にはこういう場合が多いようで、ワ行音は字余り句について検討を要

すべき点があるように思われる。「我れ」の原文「吾等」については、9一七〇五など参照。

第一の問題は、句中に単独母音を含まない字余り句、オモヒケリワレハが認められるか否かである。この点に関しては、山口佳紀『万葉集』における「非単独母音性の字余り句」について（『万葉』一八六号、二〇〇四年）が、従来の説を検討した結果、単にワが句中にあればよいのではなく、〈ウ列音＋ワ行音〉の場合に字余りを起こす事実を指摘している。例を示そう。

ユキフレシマツヲ（往触之松矣）（万一三・三三三三四）
 ファソメノキヌヲ（深染乃衣乎）（万一一・二八二八）
 アレハコヒオモフヲ（吾孤悲念乎）（万二・一〇二）
 アレハコヒナムヲ（吾恋南雄）（万一一・二七六七）

このようにウ列音（ツ・ヌ・フ・ム）の直後にワ行音（ヲ）がある時は、「E」と「Z」の調音点が近いため、音節の縮約を招き、例えばマツヲ [matuwo] が [matwo] のように発音されていたのであろうと説く。これによれば、オモヒケリワレハは〈イ列音＋ワ行音〉で〈ウ列音＋ワ行音〉になっていない。したがって、字余りを起こす条件を満たしておらず、採用しがたい。

第二の問題は、伊藤博『万葉集釈注』が②の〈吾等〉表記を尊重して、オモヒケリワレハと訓じる点である。なぜ〈吾等〉表記を尊重するとワ

レになるのか、引用文の最後に「9一七〇五など参照」とあるので、一七〇五番歌「冬ごもり春へを恋ひて植ゑし木の実になる時を片待つ吾等ぞ」における『万葉集釈注』の解説を示そう。

「我れ」は、原文「吾等」に拠ればわれわれの意で用いたものと見える。人麻呂が一座の人びとを代表してうたった意図を示そうとした表記という（窪田『評釈』・村田正博「人麻呂の作歌精神―『吾等』の用字をめぐる―」万葉第九十号）。

〈吾等〉表記は万葉歌に計一五例見られるので、いま問題としている②を除く、一四例を列挙しよう。

- （ワガカアガカを表記した例）
 A 朝日照る佐田の岡辺に群れ居つつ吾等泣く涙止む時もなし（万二・一七七）
 B 古にありけむ人も吾等ごとか三輪の檜原にかざし折りけむ（万七・一一一八）
 C 吾等恋ふる丹のほの面わ今夜もか天の河原に石枕まく（万一〇・二〇〇三）
 D 吾等待ちし秋萩咲きぬ今だにもにほひに行かな彼方人に（万一〇・二〇一四）
 E 鳴く鶏はいやしき鳴けど降る雪の千重に積みこそ吾等立ちかねて（万一九・四三三四）

〈ワレかアレかを表記した例〉

F 一本に云はく、「処女を過ぎて夏草の野鳥が崎に廬りす吾等は」(万

三・二五〇・一云)

G 木綿豊手向の山を今日越えていづれの野辺に廬りせむ吾等(万

六・一〇一七)

H 卷向の山辺とよみて行く水の水沫のごとし世の人吾等は(万七・

一二六九)

I 家人の使ひにあらし春雨の避くれど吾等を濡らさく思へば(万

九・一六九七)

J 冬ごもり春へを恋ひて植ゑし木の実になる時を片待つ吾等ぞ(万

九・一七〇五)

K 大空ゆ通ふ吾等すら汝が故に天の川道をなづみてぞ来し(万

〇・二〇〇一)

L 人皆は萩を秋と言ふよし吾等は尾花が末を秋とは言はむ(万

〇・二二一〇)

M 紅の衣にほはし辟田川絶ゆることなく吾等かへり見む(万一九・

四一五七)

N 鵜川立ち取らさむ鮎のしが鱧は吾等にかき向け思ひし思はば(万

一九・四一九一)

まず、A〈吾等〉は〈和何那久那美多〉(万一五・三六〇六)の仮名

書き例からワガ、Bの〈吾等〉は〈安我其等久〉(万一五・三七五〇)

からアガ、Cの〈吾等〉は〈安我古布良久波〉(万一四・三五六〇)か

らアガ、Dの〈吾等〉は〈安我麻都多可乎〉(万一七・四〇一四)からアガ、Eの〈吾等〉は〈安我多知奈気久〉(万一五・三五八〇)からアガと、それぞれ類推して訓まれよう。すると、〈吾等〉をワガと訓むのが一例、アガと訓むのが四例となる。ただし、万葉歌にたまたま一方の仮名書き例しか見出せないという可能性もあるので、絶対的なものと断定することはできないが、少なくとも根拠のあるほうで訓んでおくという立場をとるならば、〈吾等〉はワガよりもアガのほうが優勢ということになる。

次に、F、Nの〈吾等〉がワレかアレかを検討しよう。Fは第五句の例だから、アレでは非字余り(句中にアを含んでいるのに七音句)になるので不適切、かつ〈伊保里須和礼波〉(万一五・三六〇六)の例もあり、ワレが適切。Gは第五句だから、アレは非字余りで不適切、かつ類歌の〈伊保里世武和礼〉(万一五・三五九三)の例もあり、ワレが適切。Hは第五句だから、アレは非字余りで不適切、かつ〈代人和礼毛〉(万一八・四二二五)の例もあり、ワレが適切。Iについては、根拠なし。Jは第五句だから、アレは非字余りで不適切になるから、ワレが適切。Kについては〈麻須良和礼須良〉(一七・三九六九)の例があるから、ワレ。Lは第三句だから、アレでは非字余りで不適切になるから、ワレ。MとNについては、共に根拠なし。以上から、〈吾等〉をワレと訓むのがF・G・H・J・K・Lの六例、不明がI・M・Nの三例となる。さらに、②と同じく、結句の句中にあるF・G・H・Jの〈吾等〉は、すべてが字余りの観点からワレと訓むべき確例と言えよう。

以上、②〈念来吾等者〉はワレかアレかのいずれかであるので、右の

F、Nの〈吾等〉に検討を加えた結果、ワレで訓む蓋然性の高いことがわかった。

そうすると、〈念来吾等者〉をオモヒケリアレハと訓むのは字余りの点からは問題ないものの、表記の点からは〈吾等〉表記をアレと訓んだと断言できる例が見出せず、むしろワレのほうが穏当ということになる。

三 〈吾等〉表記をめぐる先行研究

稲岡耕二『万葉集全注・巻第十二』（有斐閣）が、二四一五番歌の【考】で、〈吾等〉表記についても言及し、解説を行っているので引用しよう。

…二歌の表現の性質が異なっていることは確認しておく必要がある。村田正博「人麻呂の作歌精神」（万葉九十号）、稲岡『吾』と『吾等』——共感の表現——（『人麻呂の表現世界』平成三年七月刊所収）に指摘されているとおり、ワレを「吾等」と記すのは、ワレワレを意味している。美しい娘子に対し親しみをこめてコラと言ひ、それを「子等」と記すのとは異なる。つまり、二四一五歌は「思ひけり吾等は」と男性の集団の共感の世界を表現するのである。布留山の瑞垣のように久しい以前からずっと自分たちは一人の処女を思いつづけてきたことだ、という。これに対して人麻呂作歌五〇一は、結句が「憶寸吾者」であって、一人の男性が高嶺の花の如き或る女性に対して、「布留山の瑞垣のように久しい

以前からあなたのことが私の心に焼きついて離れなくなった」と打ち明ける歌に作り変えられている。「憶寸」は「念来」と異なり、記憶に深くとどめられた（憶の字義）事を表わす。人麻呂は、集団の歌謡の表現を個の抒情表現としたのであり、茂吉が五〇一歌の方に「緊張」を感じ取り「一段と好い」と言うのは、ひとり歌と集団の歌との違いを感じ取ったのだとも言える。

右のような見方（「われわれ」の意識に連なる宮廷歌人としての「共感の世界の創出」の意図）に対し、『文字と古代日本5』（吉川弘文館、二〇〇六年）所収の鉄野昌弘「作歌と文字表現——『吾等』をめぐる——」は、異説を提唱した（なお、左の相聞歌②とあるのは本稿の②の歌である）。

万葉集の「吾等」を、「臚化法的表現」として理解すべきことは、すでに飯倉の提起するところであった。そして、明らかに「臚化法」とみた方が解釈しやすくなる歌が、前掲の一五首の中にはある。まず、人麻呂歌集の相聞歌②である。「久しき時ゆ念ひけり」という叙述は、およそ集団が主語であるとは考えにくい。そこで従来「吾等」の用字を、村田説に従って、集団の歌謡であることの反映と見てきた（『全注』など）のであるが、その説明は七夕歌同様、無理がある。ここは、「私の方は」の意と取るべきではあるまいか。「相手は気付かなかったかも知れないが、自分の方は、ずっと昔から恋い慕ってきたのだ」と歌う。つまり、「見渡しに

妹等は立たし、この方に吾は立ちて」(前掲三二九九歌)のイモラと同じく、相手と類をなしつつ、その片割れであることを、「等」字が示していると考えるのである。

また、小柳智一「複数と例示——接尾語ラ追考——」(前出)は、アレは単数専用で、ワレは単複両用という使用状況から見て、「吾等」が意味的に複数である以上、アレでは訓み得ないと細説する。その上で、「吾等」が「類」を表し、複数にも臚化法にも使うとする鉄野説を否定し、村田説を基本的に支持する。そして、万葉歌に見られる「吾等」は一人称複数(われわれの意)を表し、ワレで訓むのが適当であると結論づける。

ここで従来の研究を踏まえ、問題点を整理すると、こうなる。②〈念来吾等者〉をオモヒケリワレハで訓むのは、〈吾等〉をワレで訓む点はいが、短歌第五句であるのに単独母音を含まない字余りになってしまう(ウ列音+W行音でもない)点が問題になる。そこで、オモヒケリアレハのように単独母音のアを句中に含む形で訓むと、字余りの点は解消されるが、複数表示の〈吾等〉表記をアレ(単数専用)で訓むため、一人称複数を表すことと抵触する。要するに、字余りを重視するか、表記を重視するかというジレンマに陥るのであるが、これまではこうした矛盾を解決しようとする視点が欠けていたように思う。

四 ② 〈念来〉再考

それでは、②〈念来吾等者〉はどのように訓むべきか。結論から言うところ、ここは旧訓(古写本の訓)オモヒキワレハに戻るのがよいと考える。この場合、〈来〉字を助動詞キで訓むことになるが、そうすると類歌五〇一番の結句と同じ訓になる。

①思ひきわれは〈憶寸吾者〉(万四・五〇一)

②思ひきわれは〈念来吾等者〉(万一一・二四一五)

〈寸〉字と〈来〉字は、どちらも上代特殊仮名遣いの甲類のキであり、助動詞キも甲類であるから問題ない。一つネックとなるのは、〈来〉字を助動詞キに当てた用例が見出せない点である。②の〈念来〉がオモヒケリと訓まれるようになった理由は、助動詞ケリに〈来〉字を当てて用いた例が多いからである。

君にしありけり〈君西在来〉(万一一・二八〇九)

しかし、〈来〉字には訓仮名として、地名のクマキ(石川県鹿島郡中島町の中心部一帯)のキ(甲類)の音節に当てた例が見られる。

香島かしまより熊来くまき〈熊来〉をさして漕ぐ船の(万一七・四〇二七)

さらに注目すべきは、助動詞ゴトシの連体形ゴトキの活用語尾キを〈寸〉と〈来〉の文字で表記した例があるが、これは問題の〈憶寸吾者〉

と〈念来吾等者〉の関係と部分的に等しい。

咲く花の 散りぬるごとき 〈散去如寸〉(万三・四七七)

飛び翔る すぎるのごとき 〈為軽如来〉(万一六・三七九二)

訓仮名のキを認めて、②〈念来〉を従来のオモヒケリではなく、オモヒキと訓むことで、先の字余りと表記のねじれ現象をクリアできるのならば、その道を選択すべきであろう。

ところで、山口佳紀『古代日本語文法の成立の研究』(有精堂、一九八五年)所収「時制表現形式の成立〈下〉——キとケリをめぐる——」の中に、この両歌について言及がある(五〇五頁)。

キをケリと同じような意味で用いることがあった例として、次の歌を挙げることが出来るであろう。

娘子らが袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ憶寸吾者(万四・五〇)

一・柿本人麻呂

これと、

娘子らを袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ念来吾等者(万一一・

二四一五・人麻呂歌集)

との関係には、色々と問題があるが、それは別として、「思ひき」のキを単に過去の意と解すると、今は思っていないかの如くなくて、不自然である。これは、久しい以前から思い続けて今に至っているの意であると考えられる。

『万葉集』五〇一番と二四一五番の比較

すなわち、キは単に過去を表すだけでなく、ある状態が過去から続いて現在に至る、ケリと同じような用法があったという指摘である。これは助動詞キがカ変動詞ク(来)に由来し、ケリも「来+アリ」の約と考えられるところから、両助動詞に相通じる用い方があることも理解できる。また、本稿の立場からは、助動詞キに〈来〉字を用いて、「長い期間にわたって思い続けてきた」という意を視覚的に表す効果もあったと推測される。

次の例は、ケリの例であるが、新全集の頭注には「このケリは、或る事実が過去から現在まで継続して行われてきたことを示す用法」とあり、「秋は(ずっと)散ってきた(散ることを繰り返してきた)」と解される。

山背の久世の鸞坂神代より春は萌りつつ秋は散りけり(秋者散来)
(万九・一七〇七)

右のケリの用法と相通じるキの例には、「恋つつ居りき(寸)君待ちがてり」(万三・三七〇)や「人言を繁み言痛み逢はざりき(寸)」(万四・五三八)がある。「(ずっと)恋い慕っておりました。君を待ちながら」「人の噂があまりにうるさいので(ずっと)逢わなかったのです」というように、こうしたキには時間の長短に違いはあるが、ある期間にわたる連続した時間の流れが意識される。ならば、②を「思ひきわれは〈念来吾等者〉と訓じた場合、「あなたのことを(ずっと)思っってきた。私は」と解釈できよう。

なお、新全集の②（二四一五番歌）の頭注に、「〇思ひけり——一般にキは直接体験、ケリは間接体験を表すといわれるが、ここは思ヒキに同じ」という解説が見られるのは、短い説明ではあるが、〈念来吾等者〉をオモヒキワレハと訓むことの妥当性を証するものであろう。

おわりに

冒頭に示した類歌①②を、次のように訓み、解釈を試みたい。

①娘^{せとめ}子らが〈未通女等之〉袖^{そで}布留山^{ふりやま}の瑞垣^{みづかき}の久^{ひさ}しき時^{とき}ゆ思^{おも}ひき我^{われ}は

〈憶^{おも}寸^{すん}吾^{われ}者〉（万四・五〇一）

②娘^{せとめ}子^らを（処女等乎）袖^{そで}布留山^{ふりやま}の瑞垣^{みづかき}の久^{ひさ}しき時^{とき}ゆ思^{おも}ひき我^{われ}は

〈念^{ねん}来^{らい}吾^{われ}等^ら者〉（万一一・二四一五）

歌詞の違いは、初句の①助詞ガと②助詞ヲだけである。中西進『万葉集』（講談社文庫）は、このヲを詠嘆とみて、「聖少女ら、その袖を振る布留山の瑞瑞しい垣のように長く久しい間思慕して来たことだ。私は」と解釈する。しかし、木下正俊『ものをも』覚書（『万葉集研究・第三集』一九七四年六月）や近藤泰弘『助詞』を』の分類——上代——（『国語と国文学』五七卷一〇号、一九八〇年一〇月）が、詠嘆や感動を表す間投助詞ヲは文中に現れる場合、命令・希求・願望・意志の文に限られるという性質があると指摘しており、②の歌はそれに該当しないので無理であろう。ヲは動作の対象を表す格助詞と見なしてよい。よって、

①と②の歌は次のように現代語訳される。

①乙女が袖を振るといふ、その布留山の瑞垣のようにつつと前から、あなたを思ってきました。私は。

②乙女に袖を振るといふ、その布留山の瑞垣のようにつつと前から、あなたを思ってきました。我々は。

①は「柿本人麻呂が歌三首」の第一首であるが、それに続く二首を見れば、妹と別れて以降、それを忘れずにひたすら思い続けるという、一人の男性が受け身の形で回顧する姿勢で一貫している。それは①で乙女が袖を振る求愛の仕草を脳裏に焼き付けていることと結びつく。

夏^{なつ}の行く小^せ鹿^{しか}の角^{つの}の束^{むす}の間^まも妹^{いもうと}が心を忘れて思^{おも}へや（万四・五〇

二）

玉衣^{たまぎぬ}のさみさみしづみ家の妹^{いもうと}に物言はず来^きにて思^{おも}ひかねつも（万四・五〇三）

一方、②は「寄物陳思（物に寄せて思いを述べた歌）」の神祇^{じんぎ}に寄せる恋の四首の最初であるが、それに続く三首を合わせて見ると、乙女らに向かつて袖を振るといふ、積極的な行動から導かれた配列として、恋の成就を懇願する能動的な男子一般の老いらくの恋とでも言うべき思いでもって貫かれている。〈吾等〉表記については新全集が、「原文が「吾等」とあることから、男子一般の宿命的共通性を述べたとも考えられる」

と頭注で指摘するとおり、男性が共感する内容と考え、「我々」の意で解釈すべきであろう。

ちはやぶる神の持たせる命をば誰がためにかも長く欲りせむ（万

一一・二四一六）

石上布留の神杉神さぶる恋をも我は更にするかも（万一一・二四

一七）

いかならむ名に負ふ神に手向せば我が思ふ妹を夢にだに見む（万

一一・二四一八）

相違点は、わずかに助詞ガとヲの一音節助詞に過ぎないが、以下の歌群を規定する重要な働きをしていると、看取すべきである。このことは、木下正俊『万葉集全注・巻第四』（有斐閣）が五〇一番歌における【考】で、①五〇一番歌が両思いであるのに対して、②二四一五番歌は片思いかも知れないと述べていることとも関連する。

両者を比べて気付くもう一つの点は、初句がこの歌では「娘子らが」とあるのに対して人麻呂歌集の方は「娘子らを」となっていることである。ヲとあれば娘子らに向かって袖を振る意と解すべく、その場合その男（作者）が娘子らに好意を抱いているほどには娘子らは男に関心を持っていないように思われる。

本稿では、字余りの現象とワレ・アレと〈五層等〉表記を絡めつつ、類

『万葉集』五〇一番と二四一五番の比較

歌①②を比較するという極めて限定的な考察になったが、従来はこうした双方からのアプローチが徹底されていなかったように思われる。